
散歩

あきくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
散歩

【コード】
N8537B

【作者名】
あきくん

【あらすじ】
”少し不思議”の略のSFです。どこまでも散歩する、そんな話です。

散歩

老人がいつものように散歩をしていると、いつものように若い男女が話をしているところが見えてきた。彼らが話をするようになったのはいつのことだろうか。

散歩。老人にとってはその単語が正しい。しかしそれを、ウォーキング、と呼ぶ者もいる。どこが違うかといえば、ウォーキングのほうが運動のように感じるが、老人にも若い男女にもよくわからない。同じものなのかもしれないし、厳密には違うものなのかも知れない。ただ、どちらも歩くということには違いはないとは理解している。好きに使えばいい。

男の場合は散歩、女の場合はウォーキング、老人の場合は散歩。彼らはそう決めている。言い方に違いはあるが、彼らはそれぞれ毎日同じ時間に同じ道を通って歩く。そしてそれぞれに歩く理由がある。それらの点では同じだ。

男と女は毎日同じ時間に橋の前ですれ違い、それぞれが歩いてきた方に消えていく。老人は彼らがすれ違うところを、毎日同じ時間に橋の中央付近で見る。そんな状況がしばらく続き、それが三人にとつてのいつもどおりとなった。

それからしばらくたつと、いつのまにかその場所で若い男女は会話をするようになっていた。散歩をしているのだから、それを妨げない程度の二言三言の会話だ。老人は橋の中央付近よりやや彼等に寄って、その二人を見るようになった。いつか二人いっしょに歩いているところを見てみたいものだ、そう思うようになっていた。これがいつもどおりとなった。

いつもどおりがどれだけ続いていたときだろうか。この日も、男はいつもの時間いつもの場所でいつものように女と出会い、軽い話をした。それを老人が見、そして男はいつものように女のきたほう

に歩いていき、塀にぶつかってとまっているトラックの巨大なタイヤの下に、先ほどすれ違った女と同じ服を着た同じ顔の女を見た。男に恐怖はなく、ただいつもどおり歩いて家に帰った。

次の日も男はいつもの時間に散歩に出た。

昨日見たものは何だったのだろうか。幽霊か本人か。本人か別人か。そんなことを考えながら歩いた。そして、いつもの場所で女に会った。そして会話をしすれ違う。別に怖いことはない。いつもどおりのことだ。何の不思議もない。もちろん老人もいつもどおり見ていた。それからも三人は同じように過ごした。

しかし男は考える。いつまでもいるべきではない。

それから二人の会話は少し長くなり、そのぶんだけ老人は少し二人に近づいた。これがいつもどおりとなった。

その日女と会ったときに男は切り出した。

「君は何のために散歩をしているんだ？」

「何のため？」

「そう目的があるものだろ？」

「それじゃああなたにはあるの？」

「えっ、はじめは体力作りのためだったけど、今は日課かな」

「そう。わたしもそんなかんじかな」

「それでもいつか終わりはあるんだよ」

「でもあたりまえのことだからわからなくなっているのね」

「君はどうして毎日くるんだ？」

「いつものように、あたりまえのことよ。あなたは？」

「同じだよ。けどいつまでも続けることじゃない。今こうして長く話していることだって、今までなかったことじゃないか」

「何が言いたいのか？」

「変わるんだよ。いつまでも同じとはいかないんだ」

「わかっているのね」

「君はわかっているじゃないか」

「わかっているわ。あたりまえのことだからって、あたりまえのま

まじやいけないことだつてあるのよ」

「じゃあ何でここにいるんだ？」

「それはあなたよ」

「なにを……？君は、君はここにいてるべきじゃないんだ」

「それはあなたでしょ。あなたは……もう死んでいるのよ？あなたのいつもどおりは終わったのよ……？」

「……それは君だよ。僕は見たんだ。君の……死体を……」

「えっ……。でも私も見たのよ。あなたの死体を」

「えっ。その日から君はいつものように来て、いつものように……」

「あなたもそうだったのよ……」

老人が近づく。彼らの長い会話が老人に橋を渡りきらせたのだ。

「お嬢さんが一日早かった。わしはそれからも見てきたよ」

「あなたは？」

「同じようにいつもどおりの散歩仲間じゃよ」

「私たち二人とも死んでいると言うんですか？」

「ああ、そうじゃ。じゃが、いつもどおりいたときはうれしかった。

何も怖くなく、当然だと思つたものじゃ」

「あなたもですか……」

「私もそうでした。あたりまえのことで、何も疑問はありませんでした。でも私が死んでいたなんて……。いつもどおり来ていただけなのに」

「僕も何も変わったことはなかった……」

「だが真実を知つて、なおいるというのはどういふことじゃ？」

「ずっと繰り返すのかしら。ただ歩くことをあたりまえに繰り返して」

「自分でも止められないのか……」

「なぜ？今は違う。こんなに長く話し、しかもわしがいる。これはいつもどおりのことではない。そうではないのか？いつもどおりは終わったんじゃないよ。それなのに……、他に何かあるんじゃない

のかね？」

「わかりません・・・」

「私も・・・」

「理由はあるものじゃよ。ただそれに気づかないだけじゃ。いつもどおりに隠された本当の理由にな」

「あなたにはあるんですか？」

「歩くことが目的じゃてな。若い者とは違う。ふおふおふお」

「知っているんですか？」

「むう・・・。わしが思うに、会うために来とつたんじゃないかね？」

「えっ・・・」

「少なくともわたしにはそう見えた・・・」

「・・・そうかもしれない。僕は君に会うために歩いていったんだ」

「わたしも、あなたに会いたくて・・・」

「わしは前から二人一緒に歩くところを見てみたかった」

二人は同じ方にいった。

老人の散歩はまだ続く。新たな楽しみを探して。

了

(後書き)

20070419

読んでくださった方に感謝いたします。

この話は別の”忘却”という話の言わば親戚のようなものです。のような、というのは共通点がいかに多くても他人であるということです。解りにくいかもしれませんが、それは間違い無くわたしのせいです。

これは題名のとおり、ずっと散歩していくという変わらない話です。変わっても変わらないことはあるんです。・・・きっと。感想を頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8537b/>

散歩

2010年10月8日15時28分発行